

あけぼの

発行
西区人権尊重連絡会議
(事務局)
西区生涯学習推進課
☎895-7027 (FAX 882-2137)

第49回福岡市人権を尊重する市民の集い

講演
『小説『あん』で
ハンセン病快復者の人生を描いた意味』

作家・歌手 ドリアン助川さん

なぜ生まれてきたのか

コロナ禍の中、人数を制限した講演となりましたが、12月8日(火)に西市民センターにて、作家・歌手であるドリアン助川さんをお招きして人権講演会を開催しました。著書『小説『あん』』は樹木希林さんの最後の主演映画作品となりましたが、カンヌ国際映画祭のオープニングフィルムとなり、小説も世界各国で翻訳され高い評価を得ています。

ドリアンさんは昔、ラジオパーソナリティを務めていた頃、悩みを抱える若者に「生きる」との意味は「何を問うと、「社会のために」や「役に立つために」とほぼ皆が答えることに違和感を覚えたそうです。「障がいのある人に、ハンセン病の人にそんな事が言えるのか、絶対言えないと思った」と。

ハンセン病快復者との出会い

その背景には、ドリアンさんが出会ったハンセン病快復者の存在がありました。それは、ある時ハンセン病快復者の方と言葉を交わしたことをきっかけに、療養所を訪問したことに始まります。強制隔離政策と



なった「らい予防法」が平成8年によく廃止になったものの、一度ハンセン病に感染してしまうと、病気が治っても社会から隔離され、今でも患者やその家族を苦しめ続けているという現実でした。

この療養所への訪問が小説『あん』の執筆、そして映画化へとつながっていきます。



伝えたかったこと

講演の最後には、小説『あん』から、主人公である徳江さんの手紙を朗読されました。

「私たちはこの世を見るために、聞くために生まれてきた。この世はそれを望んでいない。だとすれば、教師になれずとも、勤め人になれずとも、この世に生まれてきた意味はある」と。

生きていくこと自体に意味がある。自分を認め、他者を認める。すべては関係性の中に存在している。

コロナ禍の中、様々なところで誹謗中傷や偏見が深刻な問題となる中、改めて人権の大切さを考えさせられた講演となりました。

【参加者の感想】

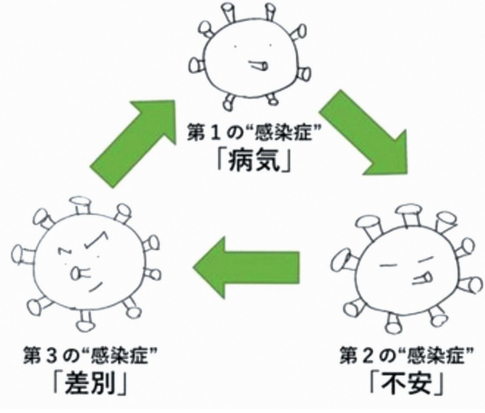
- これからも人それぞれ自分らしく生きていけるよう、私自身ができることをやっつけていきたいです。
- 今生きることがきついなと思ってる人に伝えたいです。
- 命についてしっかり考えていきたいと思えます。

新型コロナウイルス感染症の3つの顔を知ろう！

新型コロナウイルスの感染が広がる中、感染者やその家族、医療・福祉従事者の方、感染者が多い地域で生活している方、海外から帰国された方、外国人の方などに対して、様々な場面で、誹謗中傷や偏見など、心無い言動が広がっています。

3つの感染症はつながっている

この新型コロナウイルスの怖さは、日本赤十字社による「病気」だけでなく「不安」と「差別」の「3つの感染症」という顔を持つと言われています。知らず知らずのうち私たちが影響を受けていることを、みなさんはご存知ですか？



このウイルスは、目に見えない未知のものです。わからないことが多いので、私たちが強い不安や恐れを感じ、ふりまわされてしまうことがあります。その見えないウイルス感染に関わる人や対象を、日常生活から遠ざけたり、差別するなど、人と人との信頼関係や社会のつながりが壊されてしまいます。

なぜ、差別や偏見が生まれるのか

本来の敵はウイルスですが、目には見えないので不安になります。そこで、感染した人もしくは感染に関わる人を敵とみなし、遠ざけることで、つかの間の安心感を得て、本当の敵を見なくなってしまう。



「あの人が咳してる...」コロナかも」「あの地域はコロナが流行っているからあそこものを買わないでよ...」「医療従事者の子は登園しない...」「職業などに対して「危険」「ばい菌」といったレッテルを貼る心理によって差別や偏見はおこります。

この感染症の怖さは、病気が不安を呼び、不安が差別を生み、差別が更なる病気の拡散につながることであります。

負の連鎖を断ち切りましょう

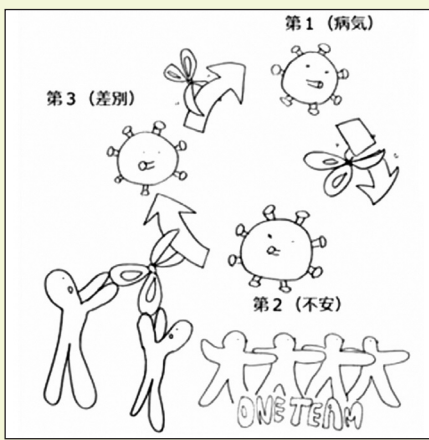
このように、新型コロナウイルスは、3つの感染症という顔を持って、私たちの生活に影響を及ぼします。

新型コロナウイルス感染症を防ぐためには、不確かなインターネット情報や身のまわりの噂話などにまどわされず、一人ひとりが正しく理解し、冷静に行動することが大切です。

皆さんも、ウイルスに関する悪い情報ばかりに目が向いていたり、なにかとウイルスに結びつけて考えたりしていませんか？

感染症はどんなに気を付けていても、誰でも感染してしまう可能性があります。「もし自分が感染してしまったら周りの人にどうしてほしいか」を想像し、感染した人を非難するのではなく、心に寄り添い、温かく迎える気持ちが大切なのではないでしょうか。

今後もしばらくは日常生活の中で、身体的距離の確保やマスクなどは必要ですが、心の繋がりは大切にしなが、それぞれ立場でできることを行い、みんなが一つになっよう、負の連鎖を断ち切りましょう！



日本赤十字社が制作した「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう」負のスパイラルを断ち切るために」より抜粋しました。

人権が尊重されるまちづくりをめざして



住みよい沓岐東校区づくりのために 人権感覚を磨こう

『明日へすすもう 沓岐東』

沓岐東校区 人権尊重推進協議会

前身の沓岐地区社同協から平成11年に分離して沓岐東校区人権尊重推進協議会として活動しています。今年度は新型コロナウイルスの影響で事業は縮小されましたが、今できることに取り組みました。小学5年生による人権ポスター1枚、中学3年生による人権標語は、地域の皆さんの投票で優秀作品が選ばれました。

11月はワールドドワークとして、戸切人権のまちづくり館で「あすなる学級の取り組み」を、12月は沓岐中学校の「被ばく柿の木物語」の取り組みを人権学習しました。校区は築44年の市営住宅・県営住宅ですが、今建て替えが始まり高齢者の環境の変化が危惧されます。新しいまちづくりに向けて校区全体ですすんでいきます。

みんなで支えあい、認めあえる校区づくり

『やさしさと笑顔あふれる能古島』

能古校区 人権尊重推進協議会

能古校区人権尊重推進協議会は、20年目になります。その間「みんなで、支え合い、認め合い、安心して住める校区づくり」を目指し活動してきました。

能古の特色を生かした活動ができないうち、実現したのが「トータルポール作り」です。小学6年生が「わたしたちの能古」を考えることから始まり、木に絵を描き、彫り、色を塗り、建てる。毎年、子ども達の能古への想いが伝わるいい作品と記念になっています。

平成17年度から海つ子制度が始まり、校区外から子ども達が通学しています。11月に開催している小中人尊協合同講演会は、校区外のPTAの方も委員になってもらい、それぞれ思いを語り、みんなで人権のことを考える機会となっています。



今年度は、コロナ禍で、活動を工夫しました。9月目になるトータルポールは、短い夏休みの中、子ども達の頑張りです。素晴らしい作品ができました。講演会は、熊丸みつ子氏をお招きしました。「こんな時こそ笑顔をお忘れなようにしよう」と伝えて下さり、皆さんとよい時間を共有できました。



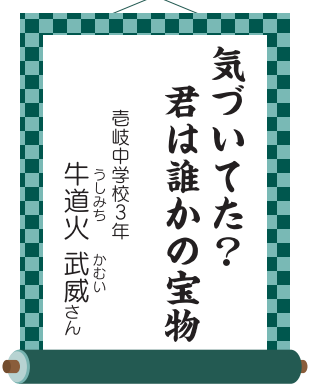
本年度は、今できることを中心に活動しています。ひとりひとりが大切にされる校区、安心して住める校区づくりをこれからも進めていきます。



令和2年度 優秀作品



のぶくにせいじゅん 信國 聖侍さん
沓岐東小学校5年



沓岐中学校3年
うしろま 武威さん
牛道火 武威さん

令和3年度 西区人権を考えるつどい

予告



西区人権尊重連絡会議では、毎年7月に「西区人権を考えるつどい」を開催しています。昨年は新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の観点から中止となってしまうました。楽しみにされていた方は、大変申し訳ありませんでした。令和3年度は感染対策を徹底した上で、7月2日(金)に開催予定です。視力を失いながらも精力的に音楽活動をされている前川裕美さんをお招きし、心温まるピアノ弾き語りコンサートを開催する予定です。詳細は後日、市政だより等でお知らせします。ぜひご参加下さい。



まえかわ ゆみ 前川 裕美さん

編集後記

今年度はコロナ禍の中、西区人権尊重連絡会議をはじめ、各校区の人尊協や公民館・学校での活動など、人権啓発活動が思うようにできない年でした。今までの生活が一変し、たくさんの制限がかかることとなりましたが、改めて、日常の生活が決して当たり前ではないと実感することもできました。何気ない日常に感謝しつつ、これからも自分を大切に、そして周りの人も大切にしていけるよう、皆さんで人権が尊重されるまちづくりを推進していきましょう。